

【試し読み】原道生監修・漆崎まり著

『江戸歌舞伎長唄成立史』

・「監修にあたって」

(二〇一九年六月五日刊行、八木書店発行)

詳細は左記サイトにて

<https://catalogue.books-yagi.co.jp/books/view/2150>

監修にあたって

i 監修にあたって

本書は、二〇一七年六月五日、膵臓癌のために早逝を余儀なくされた故漆崎まり氏が、その三年前の二〇一四年六月に、当時在籍中の国際日本文化研究センターに提出、同年九月に、総合研究大学院大学学術博士の学位を取得した博士論文「江戸長唄の基礎的研究」を「本論」とし、その後、同論文の要所を整理・発展させつつ執筆しながらも未発表に終わってしまった単発論文「江戸歌舞伎における長唄の形成―芸態の変化を捉えて―」と、自身の初期の研究テーマに関する既発表の論考「河東節正本の版行に関する一考察―江戸歌舞伎における初期の音曲正本と位置付けて―」（「北海道東海大学紀要（人文社会科学系）」第一九号二〇〇六年）の二篇を「付論」として収録することにより、不幸にして天寿に恵まれることの薄かった故人の研究生活における成果を、同じ長唄研究の専門家たちに対してのみならず、広く近世の音楽・演劇・出版等々に関心を持つ多くの読者にも伝えるということを意図して編まれたものである。

以下、この「監修にあたって」の章を借りて、今回、本書の刊行が実現するに至った経緯と、生前、故人が試みていた研究の方法及びその内容の特色に関して、右の「本論」を中心としつつ、若干の説明を

加えておくことにしたい。

まず、初めに、本書刊行までの経緯について略記しておこう。

前記二〇一四年六月に提出された学位請求論文に対しては、同年八月二四日に行なわれた公開発表会の席上、五名の査読者（主査）荒木浩国際日本文化研究センター教授、（副査）笠谷和比古同センター教授・マルクス・リュッターマン同センター准教授・蒲生郷昭東京文化財研究所名誉研究員・原道生明治大学名誉教授）のそれぞれから寄せられた、内容・表現等に関する幾つかのアドヴァイスを参照し、必要に応じた手直しを施した上で公刊されることが望ましいとの付帯意見が出されていたが、その後、故人旧知の鳥越文蔵早稲田大学名誉教授の紹介によって、八木書店よりの出版計画が決定されることとなったのである。

しかるに、その後、直ちに本人自身の手によって、決定稿作成のための準備が進められていたところ、二〇一六年春頃より、周囲に体調の不良を訴えるようになるうちに、膵臓の腫瘍が発見され、一年余にわたる抗癌剤治療により得られた一旦の小康も空しく、原稿の修正作

業の完了を見ぬままに、他界されてしまったのだった。

しかしながら、そのような予想外の不幸な事態のために、本書の刊行が中断されてしまうことを惜しんだ元指導教官の笠谷名誉教授（二〇一五年三月に右センター退任後、名誉教授となった）は、故人の御遺族の御了解を得た上で、八木書店に対し、折角進行中の本書刊行の計画が中止されることのないよう取り計らってほしい旨の申し入れを行ない、さいわい八木書店側もその要望に好意的な対応を示してくれたために、こうして本書の刊行は実現されることになったのである。なお、その際、同書作成上の基本的な事柄の確認の件に関しては、故人との生前の交友期間も長く、また、専門の領域も比較的接近しているとの理由によって、原道生が「監修」を担当することが決められたのだった。

○

次に、本書を通じて著者（以下、研究に関わる事柄についての言及に際しては、著者と記すことにする）が一貫して依拠している研究方法上の特色と、そのことによって得られた独自の成果に関して紹介しておくことにしよう。もともと、それらは、仔細に検証してゆけば、当然多岐にわたってしまうことが予想されるもので、ここでは、取りあえず左記の三点を主要な事柄として取り上げることにとどめたい。

一、本論中でも触れられている通り、旧来の長唄成立史に関わる研究は、もっぱら江戸版の顔見世番付を基本資料として進められ、それ相応の成果が着実に積み重ねられていた。一方、それに対して、本書の著者は、上演時に近い時点での具体的な諸事象の実態

の調査及びそれを活かしての初演時初版本の選定という試みにおいては、これまでの研究の水準を、一歩進めたものということができるだろう。今後の長唄史研究は、これら両者を踏まえた上に発展させられてゆくことが望まれる。

二、右のような諸本調査の結果、本書の著者は、享保一五年の顔見世興行から江戸中村座に初下りをしていいた瀬川菊之丞が、翌一六六の初春狂言『傾情福引名護屋』で傾城葛城を勤め、二月から加えられた所作事「傾城無間の鐘」と「無間の鐘新道成寺」で当たりをとったという事態を重視する。そして、その際の地の音曲の演奏者が、上方から同行してきた「小歌方」の坂田兵四郎であったのが、江戸版の正本表紙の記載では、「長うた」の唄方とされている事例もあるということに注目し、彼によって齎された上方の小歌、ないしは小歌色の強い歌が、江戸の歌舞伎界に移植され、新たに江戸長唄を地とする所作事を成立させる起点の役割を果たしたものの推論を試みているのである。さらにまた、そこでの著者は、享保後半以降、とりわけ若女方の実力者たちが多数上方より江戸下りをする中であって、それらの所作事の地の演奏を「長唄 坂田兵四郎」が勤めていることが多いという事実を明らかにした上で、それら音曲の移入とも併せて、江戸における唄正本の版行の創始にも、兵四郎の存在は大きく関わっているのではないかとの見解も示しているのだった。江戸長唄の成立と坂田兵四郎との関連については、既に通説化しているようにも思われるが、著者の研究は、さらに、その点に関しても、別の角度からの新たな問題提起を意欲的に行なっているものといえるだろう。

を、より忠実に反映させている可能性の高い文献資料という点で、作品個々の簿物正本、特にその絵表紙本の表紙に見られる演奏者・版元などの記載を重視するという態度をとっている。

ただし、この方法を採用した場合、それに伴わない派生してくる困難な問題として、これら簿物においては、非常に多数の異版が存在し、しかもその各々の刊行時についての記載が、通例ほとんどなされていないことのために、それら伝本のすべてに対して綿密な異版調査を行ない、それぞれの刊行の先後関係を推測することが、最初の基礎作業として不可欠なものとされてくることになるのである。

けれども、そのような難問に対して、本書の著者は、長年の歳月をかけて粘り強く取り組み、国内外に所蔵される八〇〇〇点前後という伝本に対し、原本そのもの、あるいは取り寄せた写真版を通して細密な点検を行ない、それに詳しく分類・整理を施した幾つもの表を作成した上で、各作品の初演時に刊行された初版本を可能な限り特定して、成立史研究の基盤を確立することに、ほぼ成功を見るに至ったのだった。本書を優れた労作と評し得る所以は、まさにこの点にあるといつてよいだろう。

もともと、この正本の記載を基本資料とするという方法に関しては、既に竹内道敬氏を中心に、赤間亮氏・吉野雪子氏・根岸正海氏らによる長年の調査の成果が、『正本による近世邦楽年表（稿）——享保から慶応まで——』として、国立音楽大学音楽研究所より一九九五年に公刊されている。従って、この着想そのものは、必ずしも本書を嚆矢とするものではないと思われるが、歴大な異版

ちなみに、この坂田兵四郎は、元禄期の名優坂田藤十郎の甥であり、義子でもあったとされている、そのことは、いいかえれば、兵四郎によって移入された江戸長唄の源流は、その系譜からいって、元禄上方歌舞伎の和事芸にまで溯ることができるといつてよいだろう。だとすれば、初代坂田藤十郎という存在に関しては、単に上方和事芸の祖というばかりではなく、享保期以降、江戸長唄を基本的な伴奏音楽として栄えた、「歌舞伎」という近世演劇のジャンルそのものの成立に対しても、多大な影響を及ぼした重要な存在としても捉え直す必要もあるのではないかと思われる。

三、本書の著者は、このように歴大な数に及ぶ伝本間の異版調査を通して、さらに長唄簿物の版権が確立されてくる過程を具体的に捉えるということを意図した出版研究をも試みている。なお、そうした着想の基本には佐藤悟氏の「地本論——江戸読本はなぜ書物なのか」（『読本研究新集』第一集、翰林書房、一九九八年）よりの刺激が働いている由を聞かされたように記憶しているが、それはともあれ、そこでの著者は長唄の簿物を江戸の草紙（地本）の一品目と見なし、それが、享保年間より明治期に至るまでの長い年月をかけて継続出版されていたという点に、他のジャンルには見ることのできない資料的な強みがあると評価した上で、中村座を事例にその具体的な考察を行なっているのだった。そして、その結果、江戸の中村座にあつては、寛政期に株板、すなわち、原版所有者の権利の保証が公認されるようになったとの見解へと論を進めているのである。

それにまた、そこでは、そうした動向についての検証とも関連させながら、江戸の演劇文化の中で、当初は観劇用パンフレットとしての役割を果たしていた長唄正本が、その愛好者の増大に応じて、音曲技術習得のための稽古本へと成長し、再販性の高い出版読物として、さらに版行を重ねる存在になっていったということや、次第に記譜法の発達が見られるようになっていくところへ、明治期の西洋音楽の導入による洋楽の楽譜からの影響が加わり、今日通行の長唄の譜本へと連なるものとなったということなど、現代の問題へとも発展させられる視野の広さと射程距離の長さなどを備えた幾つもの意欲的な指摘もなされていたのだった。

しかしながら、まことに残念なことに、これらの諸点をめぐっては、自身の手による深化を実現することなく、著者は、その短か過ぎる生涯を終えてしまったのである。その心残りのほどは、察するに余りがあるといふべきだろう。

願わくは、本書の読者の方々によって、著者が生前に試みた、右記のような問題提起のさまざまを、より発展的に受け止めていただけることを、心から期待して止まないものである。

○

ここで少々私事に触れることをお許しいただきたい。

私が故人と知り合うようになったのは、一九八〇年代の半ば、明治大学文学部に着任して間もない頃、同校の前任者であった水野稔教授の指導生で、桜田治助を中心とする江戸の芝居・音曲の研究を志していた鹿倉秀典氏が、平素出席している長唄正本研究会の仲間というこ

とで、当時まだ東京芸術大学楽理科の院生だった故人を、私の研究室に伴ってきてくれたことが発端だったように覚えている。そして、以後三〇余年にわたる交友が続けられてきたという次第だが、私のおほろ気な記憶では、まだその頃の故人は、後に本書のテーマとなる、長唄薄物の異版調査の作業には着手していなかったのではなからうか。ただし、既に専門的な研究の面でも、また演奏の実技という点でも、長唄に関する造詣には、かなり深いものがあり、その方面については全く暗かった私には、さまざまな会話の中で初めて教えられたという知識も少なくなく、断片的な耳学問ながら、貴重な勉強をさせてもらったものである。

ちなみに、右の三〇余年間のうち、故人は一時、明大大学院の私の授業に聴講生として顔を出してくれたこともありはしたが、実際には、主として私の校務の多忙さに災いされて、落ち着いて話をするという時間もなかなか取れなかったため、止むなく、諸種の学会や研究会で同席した折や、時たま訪れてくれた私の研究室での短い会話を通してとか、あらかじめ送ってもらった論文の草稿に対しての感想・注意などを、札幌あるいは京都からの電話口で伝えたりするという程度のやりとりが、専門研究に関しての主たる意見交換のごく限られた機会ということになってしまったのだった。従って、故人は本書の中において、私の「指導」を受けたと書いてはいるが、実質的には、右記のような時間不足や私自身の力不足のためあって、その時々相手の関心に応じた、本来の「指導」の名に値するような適切な助力は何一つできないままに終わってしまったということ、今改めて申しわけなく思うばかりである。今回、私が、自らの適格性の

欠如を十分に承知した上でなお、こうして「監修」の役目を引き受ける覚悟を決めたのは、右の期間を通じて、しばしば故人から受けた質問や相談に対し、ほとんど有効な返答をできないままに過ごしてしまったという事態に対するせめてもの埋め合わせをしたいたの気持が働いての上の成り行きというに他ならない。

ところで、長らく学位論文の件で迷っていた故人が、その提出を前提に、専心取り組むようになったのは、私が直接聞いた限りでは、二〇一〇年度より総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻の博士課程に入学を許可されて、指導教官の笠谷教授を始めとする諸先生方の指導・鞭撻を受け、加えて、同専攻の院生たちとの間に好ましい交友関係が結ばれるようになったという環境の変化が大きくな契機となったのではないかと思われる。そのことは、従来、私が故人から受ける電話等においては、本題である研究に関わる諸問題よりも、ともすれば、馴れない人間関係に対する不安や愚痴などにかかなりの時間が費やされるのが常であったのが、この頃を境に、後者の分量が以前よりは減じてきたという事態の上にもうかがわれるように私には感じられ、安堵の念を抱いたものである。

しかしながら、折角こうして恵まれた状況下にあつて完成へと至った博士論文により、指導教官の任期最後の年度内に学位の取得を果たし、また、次年度からは、国際日本文化研究センターの研究員としての雇用も決定するという、すべてが望ましい方向へと進み始めたその中にあつて、突然見舞われた不幸な急逝という事態に対しては、まさに惜しみて余りあるという以外、私には述べるべき言葉がない。

やや余談に類する事柄ではあるが、右に関連して、別件を一つ付言

することを許されたい。実は、時間的順序が逆になってしまったが、先に故人を私に紹介してくれた鹿倉秀典氏も、残念なことに、右に先立つ二〇一四年の十一月、同じく癌疾のために、やはり早逝してしまったのである。こうして私は、親しくしてもらっていた若い長唄研究者の二人までを、三年間の内に相次いで失うという高齢の身にとっては何よりも辛い悲しみを、深く味あわなければならぬことになったのだった。

今はそのお二人が安らかにお眠りになられることを、心からお祈り申し上げるばかりである。

本書の監修に際して、私が行なったこととして、著者の原稿に対し、幾つかの加筆修正を施した点について少々付け足しておくことにしよう。中には、「監修」という領域を多少踏み越えてしまうのではないかと躊躇せられたものもないではないが、その本意としては、原著をできるだけ読み易くすること、とりわけ、本書最大の特徴の一つである膨大な諸本調査の結果を細かく整理した多数の表に示された記述と、その一々を踏まえた本論の論述との関係を、より捉え易く理解し易くするということを意図したものであるので、故人も許してくれるものと考えている。具体的には、拙稿の末尾に、凡例風に箇条書きで記しておくことにするので、ご参照願いたい。

○

本書の監修に際しては、生前、故人と親交のあった近世音楽研究家の配川美加氏にお願いして、さまざまな相談に乗っていただき、特に

用語（音楽用語）、固有名詞の読み等に関しては細かな御教示に与った。また、同じく吉野雪子氏にも、同様の御縁で、直接・間接の御助力をいただいた。

なお、本書の作成全般に関しては、八木書店会長の八木壯一氏により前記の如きありがたい御高配を賜った。また、その際の具体的な作業の一事について示された編集部の滝口富夫氏を始めとする皆様方の細やかなご配慮も忘れることができない。

末筆ながら、併せて心からの謝意を表したい。

二〇一九年五月

原 道 生

監修に際して施した加筆修正の凡例

- 一、本編中の書名・曲名に関しては、ふり仮名を付した。
- 二、第一部には、三つの座毎に表が備わっているが、第一の中村・都座の表番号の表記は算用数字を、第二の市村・桐座のそれはローマ数字を、第三の森田・河原崎座のそれは漢数字を用いて、區別し易いようにした。
- 三、本文で、取り上げた曲名に相当すると思われる巻末所収の表中の曲名は太字で記し、本文と対照しやすくなるよう心がけた。
- 四、掲載した図版には、編集上の整理のために部・章・掲載順を元にした図版整理番号を付した。